

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：32415

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730513

研究課題名(和文) 幼児における心の理解と自我発達：性格特性推論との関連

研究課題名(英文) Understanding of Mind and Ego (Self) Development in Preschool Children: Association with Personality Trait Inferences

研究代表者

長田 瑞恵 (NAGATA, Mizue)

十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：80348325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：主に以下の3点を検討した。第1に、幼児期の性格特性理解を原因帰属推論として捉え直した検討を行った。第2に、特性推論における行為者の違いの影響を検討した。第3に特性推論と自称詞の発達と関連について検討した。その結果、次の事柄が明らかとなった。第1に事象の原因として内的要因(意図)と外的要因(物理的事象)が共存する時、成人と幼児の場合とで提示順序が原因帰属推論や行為者の特性推論に与える影響が異なった。第2に、特性推論すべき対象者との関係性が成人も幼児も特性推論に影響を与えた。第3に、特性推論すべき対象者が用いる自分の呼称を操作すると、成人も幼児も敏感に区別して反応していることが示された。

研究成果の概要(英文)：There were 3 objectives in this study; firstly to consider understanding of personality trait during childhood as attributional reasoning to make assessments, secondly to assess effects of differences according to performers in trait inferences, and thirdly to assess development of trait inferences and first-person pronoun as well as associations between them. According to the result, the following points were revealed. Firstly, when both an internal factor (intentions) and an external factor (physical events) co-existed as a cause for an event, the effects of presentation order on attributional reasoning or performer's trait inferences were different between adults and preschoolers. Secondly, the relationship with subjects to be inferred affected the personality trait inferences both in adults and preschoolers. Thirdly, when the first-person pronouns used by subjects to be inferred were manipulated, they immediately sensed the differences and responded accordingly.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 自称詞 特性推論 原因帰属推論 内的要因 外的要因 発達の变化 心の理解

1. 研究開始当初の背景

子どもや大人が自分や他者の心をどのように理解し、心についてどのように語るのかを明らかにすることは非常に重要である。なぜなら、自他の心を理解することは、日常生活の中で社会的に上手く振る舞ったり、様々な場面で自分自身をコントロールしたりするために非常に重要だからである。心についての子どもの理解は、「心の理論(e.g., Perner, 1991)」の発達を中心に検討されてきた。しかし、心の健康や適応の問題が重要視されている昨今、心についての理解が実際の生活でどのように表現されるのかという問題や、心の理解が社会生活で果たす機能について検討することが重要であろう。さらに、心の健康を考える上で自我の発達は重要な課題の一つであり、幼児期から自我の発達を多面的に検討する意義は大きい。そこで本研究では、自我の発達との関連から、幼児期における心の理解を中心に検討する。そして、心の理解の一側面として性格特性推論(以後「特性推論」と呼ぶ)に焦点を当てる。

心の理解を表すものの1つとしての心的用語が挙げられる。幼児期初期については主に観察研究が行われ(e.g., Bretherton & Beeghly, 1982; 齋藤(長田)ら, 2001), 幼児期初期は、他者についてではなく、主に自分のことを表現するために心的用語を用いることが示された(Booth, et al., 1997)。ここで、自分自身だけでなく他者についても心的用語を用いて言及できるようになるためには、自我の発達に伴って自他の区別が明確になる必要があると考えられる。

また、自我の発達を表すものの一つに自称詞がある(西川, 2003)。子どもたちは2歳過ぎから主に自分の愛称(3人称)を名乗って他者との区別を明確にし(西川, 2003)。その後、3歳頃からは一人称代名詞を用いるようになる(Wallon, 1956/1983)。このように、自称詞の獲得にも自分とは異なるものとして他者を区別できるという点で、自我の発達が関連していると考えられる。応募者もこれまで自我の発達との関連を想定し、自称詞の使用と心理的な他者視点の獲得や心的用語の使用とが関連することを示した。しかし、自我の発達と心的用語の理解・産出、自称詞獲得との関係については更に詳しい検討が必要である。

ところで、心的用語で表される内的状態の中には、「優しい」などの性格特性に関するものも含まれる。先行研究から、幼児は、他者の性格特性を推論する際に結果を重要視する「結果主義」であることが指摘されており、内的要因と結果が不一致である場合には、4歳以下の幼児は結果と一致した特性判断をすることが示されている(清水, 2000)。

2. 研究の目的

以上の問題意識を踏まえ、本研究では以下の3点を主な目的として検討を行った。

第1に、幼児期の性格特性理解を原因帰属推論として捉え直した検討を行う。具体的には、結果の原因の帰属先(内的 vs. 外的)によって特性推論も影響を受ける可能性を検討した。

第2に、行為者の違いによって特性推論で重視される情報が異なるのかを検討する。具体的には、行為者が自己の場合と他者の場合とで重視される情報や推論結果の違いを比較した。

第3に特性推論は心についての理解、特に自称詞の発達と関連するののかについて検討した。具体的には、特性推論課題の判断状況やその理由が、提示刺激中に含まれる行為者が用いる呼称・自称詞の形に影響を受けるのか否かを検討した。

3. 研究の方法

本研究は3つの研究から成り立っているため、以下にそれぞれの研究の方法を記載する。

(1)研究1 研究1では、心の理解の一側面として性格特性の理解に焦点を当て、原因帰属推論として幼児期の特性理解を捉え直し、結果の原因の帰属先や行為者の違いによって幼児の性格特性推論が影響を受ける可能性について検討することを目的とした。特に事象の原因として内的要因(意図)と外的要因(物理的事象)の両者が共存する時、その提示順序が、結果の帰属先の判断や、主人公の特性推論に影響を与えるか否かを検討した。方法 被験者：保育園年中クラス児15名、年長クラス13名、成人252名 実験計画 年齢(3)×主人公の内的要因(ポジティブ; P, ネガティブ; N)×結果(P, N)×提示順序(内的要因先, 外的要因先)の4要因配置であった。内的要因、結果は被験者内要因、年齢と提示順序は被験者間要因であった。*手続き：内的要因(P, N)×結果(P, N)×提示順序(内的要因先, 外的要因先)の3条件を操作したストーリーを作成し、被験者に対し主人公の内的要因と結果の組み合わせ(PP, PN, NP, NN)を操作した8つのストーリーを静止画と共に提示し、どうして「結果」は生じたか、主人公は良い子か悪い子か、その判断理由を質問した。

(2)研究2 結果の原因の帰属先や行為者の違いによって性格特性理論が影響を受ける可能性を検討した。その際、提示刺激中の主人公である幼児が「一般的な幼児」であるか「自分・又は自分の子ども」であるかを要因に加え、判断に影響を与えるかを検討した。方法 被験者：保育園年中クラス児15名、年長クラス13名、成人517名 実験計画 年齢(3)×主人公の内的要因(ポジティブ: p, ネガティブ: N)×結果(P, N)×提示順序(内的要因, 外的要因先)×主人公との関係(他者・自分もしくは自分の子)の5要因配置であった。内的要因、結果は被験者内要因、年齢と提示順序、主人公との関係は被験者間要因であった。*手続き：内的要因(P,

N) × 結果 (P, N) × 提示順序 (内的要因先, 外的要因先) の3条件を操作したストーリーを作成し, 被験者に対し主人公の内的要因と結果の組み合わせ (PP, PN, NP, NN) を操作した8つのストーリーを静止画と共に提示した。その際, 条件に応じて, 幼児に対しては「主人公が〇〇ちゃん・君 (被験者自身) だと思って聞いてね」, 成人に対しては「自分のお子さんだと思って判断してください」と教示した。そして, どうして「結果」は生じたか, 主人公は良い子が悪い子か, その判断理由を質問した。

(3) 研究3 心の理解の一側面として性格特性の理解に焦点を当て, 結果の原因の帰属先や行為者の違いによって性格特性理論が影響を受ける可能性を検討した。その際, 成人の場合には, 提示刺激中の主人公である幼児が用いる呼称 (一般的な名前なのか, 一人称自称詞なのか) が判断に影響を与えるかを検討した。幼児を対象にした研究では, 主人公が一般的な他者なのか自分自身と仮定した場合かで判断に影響を与えるかを検討した。方法 被験者 30代の子育て中の男女合計529名を男女・年齢に偏りのないよう4条件に割り当てた。実験計画 ストーリー (4: 意図・結果の順に共にポジティブ (PP), ポジティブ・ネガティブ (PN), NN, NP) × 結果の原因の候補の提示順序 (2: 内的要因先行, 外的要因先行) × 自称詞 (2: 一般的な名前, 一人称自称詞 (僕又は私)) の3要因配置であった。ストーリーは被験者内要因, 他は被験者間要因であった。*手続き 主人公の意図と結果の組み合わせを操作したPP, PN, NN, NPに対応する幼児が主人公のストーリーを2種類ずつ8つ作成 (表1参照)。静止画と共にストーリーを提示。その後, どうして「結果」は生じたか, 主人公は良い子か悪い子か (特性判断), その理由をそれぞれ選択肢で質問。なお, ストーリーの提示順序や主人公の性別は条件間で偏らないよう統制した。

4. 研究成果

3つの研究結果を順に述べる。

(1) 研究1 研究1では, 結果の原因の帰属先や行為者の違いによって幼児の性格特性推論が影響を受ける可能性について検討することを目的とした。特に事象の原因として内的要因 (意図) と外的要因 (物理的事象) の両者が共存する時, その提示順序が, 結果の帰属先の判断や, 主人公の特性推論に影響を与えるか否かを検討した。

結果

成人の結果 以下の3点が明らかになった。第1に事象の原因帰属先について, 事象の原因を外的要因に帰属した場合に1点を与えた。全条件で内的要因と外的要因の提示順序の効果が明らかであり, 先に内的要因を提示された場合には結果の原因を内的要因に, 先に外的要因を提示された場合には原因を外的

要因に帰属した。

第2に行為者の性格特性推論について, 行為者の性格特性を「良い子」とした判断した場合に1点を与えた。PP条件 (内的要因P, 結果P) とPN条件 (内的要因P, 結果N) では提示順序にかかわらず主人公は「良い子」, NP条件 (内的要因N, 結果P) とNN条件 (内的要因N, 結果N) では提示順序に拘わらず主人公は「悪い子」と判断された。

第3に, 性格特性の判断理由について, 全条件で特性推論の根拠として主人公の内的要因が挙げられた。以上の結果から, 成人は出来事の結果の原因は時間的配列に基づいて判断するのに対し, 主人公の特性は主人公の内的要因 (内的要因) に基づいて判断することが示された。

幼児の結果 自我の発達が著しい学年の影響に特に注目して分析を行った。その結果, 以下の3点が明らかとなった。

第1に事象の原因帰属先について, 事象の原因を外的要因に帰属した場合に1点を与えた。学年 × 提示順序の2要因分散分析を行った結果, 提示順序の主効果が有意であり, 外的要因が先に提示されると事象の原因を内的要因に帰属し, 内的要因が先に提示されると原因を外的要因に帰属することが示された。学年の主効果や学年 × 提示順序の交互作用は有意ではなかった。

第2に, 行為者の性格特性推論について, 行為者の性格特性を「良い子」とした判断した場合に1点を与えた。学年 × 提示順序の2要因分散分析を行った結果, いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

第3に性格特性の判断理由について, 行為者の性格特性の判断理由について, 結果ではなく内的要因 (行為者の意図) に理由づけした場合に1点を与えた。学年 × 提示順序の2要因分散分析を行った結果, 年齢の主効果が有意であり, 4歳児の方が性格特性の判断理由として行為者の意図に理由づけすることが示された。

以上の研究1から, 事象の原因として内的要因 (意図) と外的要因 (物理的事象) の両者が共存する時, 成人の場合と幼児の場合とで提示順序が原因帰属推論や主人公の特性推論の与える影響が異なることが示された。具体的には, 成人は先に提示された方の原因の候補を事象の原因として考えるのに対し, 幼児の場合には, 後に提示された方の原因の候補を事象の原因として解釈することが示された。

さらに, 幼児については自我の発達が目まじしいと考えられる年中児と年長児とを比較した場合, 唯一異なっていたのは, 主人公の性格特性の判断理由のみであり, 4歳児の方が行為者の意図という内的要因をより重要視することが示された。この結果は4歳以下の子どもは「結果主義である」とする先行研究 (e.g., 清水, 2000) とは異なる結果である。今後, なぜこのような先行研究とは異なる

る結果が得られたかについて、詳細な検討が必要である。

(2) 研究2

性格特性の理解を原因帰属推論として捉えなおし検討を行う際に、提示刺激中の主人公である幼児が「一般的な幼児」であるか「自分・又は自分の子ども」であるかを要因に加え、判断に影響を与えるかを検討した。

結果

成人の結果 以下の2点が明らかになった。

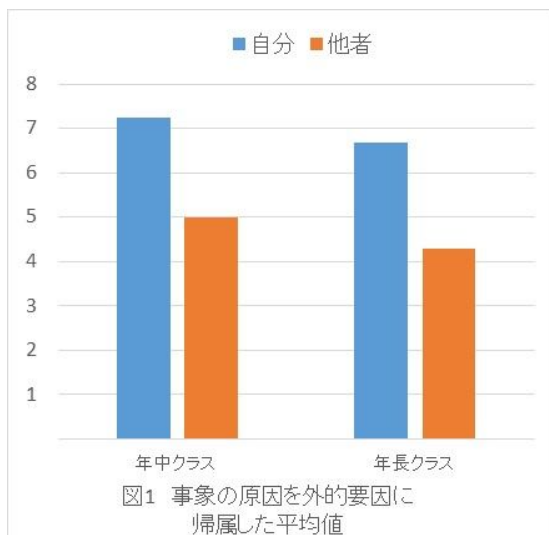
第1に事象の原因帰属先と特性判断について、主人公が他者条件では内的要因と外的要因の提示順序の効果が明らかになったが、特に内的要因と結果がともにネガティブな条件では、内的要因が先に提示されると主人公が自分の子どもの場合に「悪い子」判断が多かった。

第2に特性推論の根拠について、主人公が他者の子どもか自分の子どもかによって、各要因の主効果や交互作用の有無や方向性が異なった。

以上の結果から、成人が原因帰属推論をする場合には、主人公の内的要因や結果だけでなく、行為者との関係性が判断に影響することが示された。

幼児の結果 以下の3点が明らかとなった。

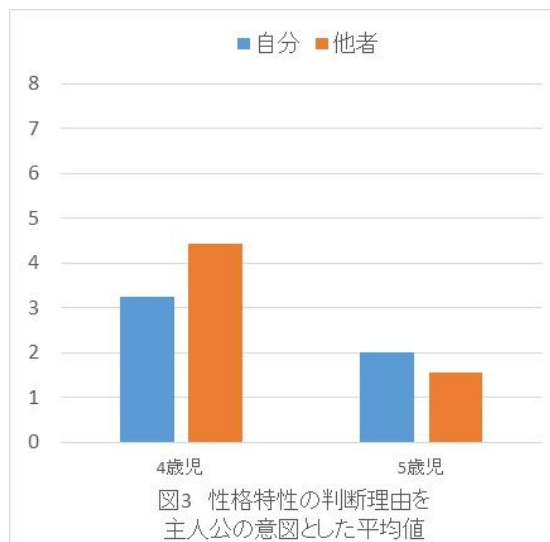
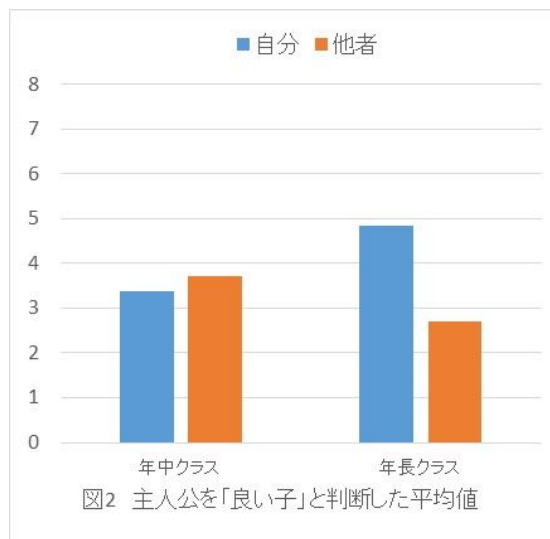
第1に事象の原因帰属先について、事象の原因を外的要因に帰属した場合に1点を与えた。学年×行為者の2要因分散分析を行った結果、行為者の主効果が有意であり、行為者が自分自身の場合には事象の原因を外的要因に帰属し、行為者が他者の場合には原因を内的要因に帰属することが示された(図1)。それ以外の主効果・交互作用は有意ではなかった。



第2に行為者の性格特性推論について 行為者の性格特性を「良い子」とした判断した場合に1点を与えた。学年×行為者の2要因分散分析を行った結果、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった(図2)。

第3に性格特性の判断理由について、行為

者の性格特性の判断理由について、結果ではなく内的要因(行為者の意図)に理由づけした場合に1点を与えた。学年×行為者の2要因分散分析を行った結果、年齢の主効果が有意であり、4歳児の方が性格特性の判断理由として行為者の意図に理由づけすることが示された(図3)。それ以外の主効果・交互作用は有意ではなかった。ただし、5歳児は行為者の意図のみ又はもう一人の登場人物の反応のみといった単一の理由のみを回答せずに、例えば「さちえちゃんを悲しませようとしたけど良いことになったから。」というように回答内容が複雑になった幼児がいたために、表面上4歳児の方が高得点になった可能性がある。



(3) 研究3

心の理解の一側面として性格特性の理解に焦点を当て、結果の原因の帰属先や行為者の違いによって性格特性理論が影響を受ける可能性を検討した。その際、成人の場合には、提示刺激中の主人公である幼児が用いる呼称(一般的な名前なのか、一人称自称詞なのか)が判断に影響を与えるかを検討した。

幼児を対象にした研究では、主人公が一般的な他者なのか自分自身と仮定した場合かで判断に影響を与えるかを検討した。

結果

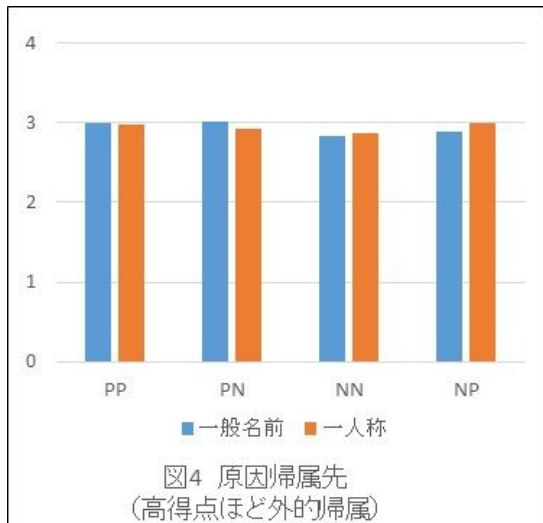
成人の結果 成人について以下の2点が明らかとなった。

第1に結果の原因の帰属先について、ストーリー×提示順序×自称詞の3要因反復測定分散分析を行った結果、ストーリーの主効果、提示順序の主効果、ストーリー×自称詞の交互作用が有意。ストーリー×自称詞の交互作用の下位検定の結果、一人称条件ではNPはNNよりも原因を外的要因に帰属したが、一般名条件でPPとPNはNNより、NPはPNより外的要因に帰属した(図4)。

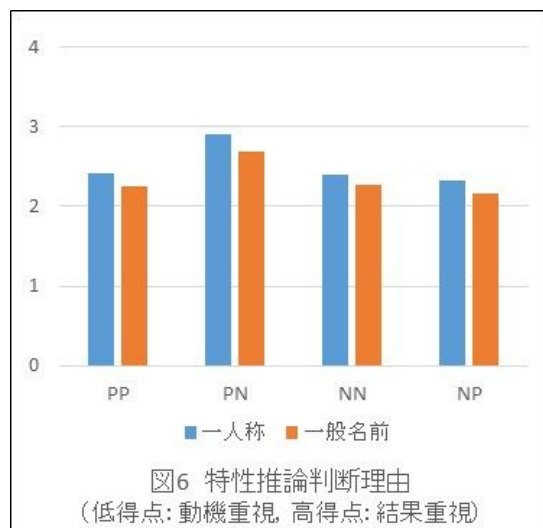
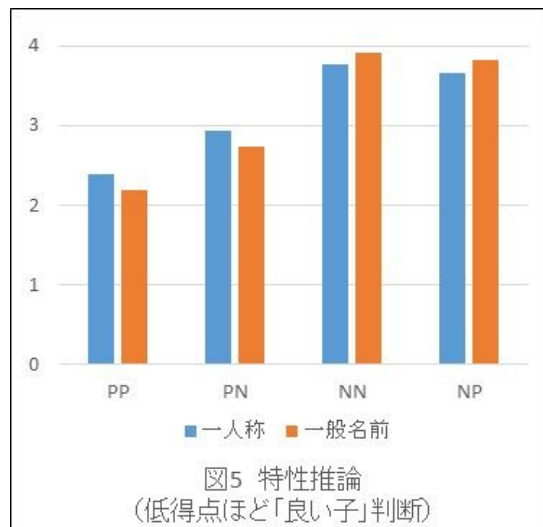
第2に特性推論と判断理由(図5,6)について、ストーリー×提示順序×自称詞の3要因反復測定分散分析を行った結果、ストーリーの主効果、提示順序の主効果、ストーリー×自称詞の交互作用が有意。ストーリー×自称詞の交互作用の下位検定の結果、両条件でPP>PN, PP>NN, NP>PP, NN>PN, NP>PN, NP>NNの関係で「良い子」の判断が多かったが、ストーリー間の差の大きさに違いがあった。

特性推論の判断についてストーリー×提示順序×自称詞の3要因反復測定分散分析の結果、ストーリーの主効果(PN>PP, NN>PP, NP>PP, PN>NN, PN>NP, NN>NP)の関係で結果重視)、自称詞の主効果(一人称の方が結果重視)と提示順序の主効果(外的先行条件の方が外的帰属)が有意であった

本研究の結果から、内的・外的要因の2つが結果の原因の候補として同時に提示された場合、提示順序や意図と結果の組合せの影響と複雑に関連しながら、行為者の呼称の違い(=推定される行為者の違い)が原因帰属や特性判断に影響することが示された。



幼児の結果 研究1,2の結果から、幼児については学年による違いは特性推論の根拠のみに示されたため、研究2では学年を要因からは外して分析を行った。



その結果、以下の3点が明らかとなった。

第1に事象の原因帰属先について、事象の原因を外的要因に帰属した場合に1点を与えた。行為者×提示順序の2要因分散分析を行った結果、行為者の主効果が有意であり、行為者が自分自身の場合には事象の原因を外的要因に帰属し、行為者が他者の場合には原因を内的要因に帰属することが示された。また、提示順序の主効果も有意であり、外的要因が先に提示されたときには事象の原因を内的要因に帰属し、内的要因が先に提示された場合には外的要因に帰属することが示された。これは幼児の記憶容量から考えて、提示順序の新近性効果が示されたものと解釈できよう。

第2に行為者の性格特性推論について、行為者の性格特性を「良い子」として判断した場合に1点を与えた。行為者×提示順序の2要因分散分析を行った結果、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

第3に性格特性の判断理由 行為者の性格特性の判断理由について、結果ではなく内的要因(行為者の意図)に理由づけした場合に1点を与えた。行為者×提示順序の2要因分散分析を行った結果、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

以上の研究3の結果から、成人も子どもも、原因帰属推論や行為者の特性推論を行う際に、主人公が用いている自称詞を敏感に区別して反応していることが示された。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。まず、今回は当初予定していた自我の発達の指標を直接的に収集することができなかった。また、自称詞についても、使用する自称詞の違いが聞き手の成人に与える影響については検討できたが、幼児自身が使用する自称詞の違いとその他の要因との関連を直接検討することが出来なかった。

さらに、研究協力園との日程調整が難しく、縦断的にデータを取ることが出来なかった。うえ、研究3に関しては、幼児のデータを十分な数収集することが出来ず、分析が出来なかった。

そこで、今後、ここで指摘したような問題点に関して、さらに詳細な検討が必要であると考える。

<引用文献>

Perner, J.(1991). Acquiring a theory of knowledge. in Understanding the representational mind. Cambridge: Bradford:MIT Press.

Bretherton, L. & Beeghly, M.(1982).Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. Developmental Psychology, 18, 906-921.

齋藤(長田)瑞恵・内田伸子・大宮明子(2001), 家庭相互作用場面における認知的動詞の産出文脈の検討, 日本発達心理学会第12回大会, 鳴門教育大学.

Booth, J. R., Hall, W. S., Robinson, G. C., & Kim, S. Y.(1997). Acquisition of the mental state verb know by 2- to 5-year-old children. Journal of Psycholinguistic Research, 26, 581-603.

西川由紀子(2003) 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して, 発達心理学研究, 14(1), 25-38.

Wallon, H.(1983) 『身体・自我・社会』(浜田寿美男, 訳編) 京都: ミネルヴァ書房. (Wallon, H. (1956). Niveaux et fluctuations du moi. L'Evolution psychiatrique. I.)

清水由紀(2000) 幼児における特性推論の発達 - 特性・動機・行動の因果関係の理解 -. 教育心理学研究, 48, 255-266.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計2件)

長田 瑞恵, 幼児における原因帰属と性格特性推論, 日本発達心理学会第26回大会, 東京大学(東京都文京区), 2015年3月20日.

長田 瑞恵, 行為者が幼児の場合の成人における性格特性推論, 日本教育心理学会第57回総会, 新潟大学・朱鷺メッセ(新潟県中央区), 2015年8月26~28日(予定).

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等
<http://www.jumonji-u.ac.jp/laboratory/nagata/> (十文字学園女子大学長田研究室)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 瑞恵(NAGATA Mizue)
十文字学園女子大学・人間生活学部幼児教育学科・准教授
研究者番号: 80348325

(2) 研究分担者 なし
()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし
()

研究者番号: